

「森林の多面的機能」
解説シリーズ

第40回 森林から得られる植物材料

研究管理官 埴田 宏

緑化材料、観葉植物

森林の中ではごくありふれた種類であっても、それを育てる場所によっては大変喜ばれる植物があります。例えば、スギ造林地に多いアオキは、常緑樹でありながら-15℃もの低温に耐えるという性質がプラントハンターの目にとまり、1783年にイギリスに移入されています。ただし、持ち込まれた株が雄株だったため、花を咲かせても実を着けることはありませんでした。

「江戸と北京」の著者としても知られるイギリスの園芸学者ロバート・フォーチュンが、幕末に日本を訪れ、アオキの雌株を持ち帰って初めて、彼の地でアオキが実を結んだのです。それは1864年のこととされています。その後は、ロンドン市の大気汚染と寒さに耐えたアオキが緑の葉の間に真っ赤な実をつけるようになりました。

日本式の庭園では日陰に植物を植えることが多く、植栽に適した植物を森林内で探します。地被植物のジャノヒゲ、フッキソウなどは、もともと、常緑樹林の林床に生育していたものです。タネを拾って苗畑で芽を出させたり、株分けで繁殖させる技術によって、広く利用されるようになりました。

緑化樹の生産方法のひとつに「山採り」があります。自然の中で大きく育った樹木を掘り取り、1年くらい苗畑で育てた後に出荷する方法です。これも、森林がもたらす恵みといえるでしょうが、やってはいけないことです。林道の斜面などに芽生えた実生を盆栽の材料にしたり、伐採予定地に生育している樹木を有効利用するのは許される範囲かもしれません。しかし、自然林から略奪されたものと区別がつかない場合はやめるべきです。

工芸材料

植物体や成分は様々に加工されて、私たちの役に立っています。そのうち、建築用材や紙パルプのように大量使用されるもの、食用や薬用を除いたものが工芸的使用とされています。熟練した技を使って付加価値を高めていることも特徴になります。竹を使った籠（かご）や笊（ざる）、ウルシの樹液をつかった漆塗り、シャリンバイ・タブノキの樹皮タンニンを使う染物などが伝統的工芸品の例になります。

工芸植物の多くは、より良い品種が採られ、特別に栽培されるようになりました。しかし、自然に生育しているものを集める場合も少なくありません。つる植物を編んで作ったカゴやリースが、山村の直売所や道の駅で販売されるだけでなく、都会からの訪問客向けの製作体験教室が繁盛しています。

つる植物の場合は自然に生育しているものを採取することに問題が少ないようです。もともと、つる植物が繁茂すると巻き付いた相手の樹木を枯らしたり、弱らせます。最近では、人工林の手入れ不足のために、つる植物が増えています。フジやシラクチヅルのように太く長いつるを切り出すのは、山仕事に慣れた人でないと危険が伴いますが、アケビ、ヤマブドウなどは道端の低い樹木に絡みついたものがたくさんあります。

アオツヅラフジのように太さが一定で長いつるを使うと、日の詰んだ丈夫なものができます。ところが、高い技術で編まれた本格的な道具ほどプラスチック製品に置き換えられました。太さが不ぞろいで、いびつな形にしかならないフジづるで作った粗いカゴが喜ばれているのは野性への回帰といったところでしょうか。



フジやアケビのつるで作った工芸品